

歴史の節目、台湾總統

—立法委員同日選舉

東京新聞・中日新聞 台北通信員 迫田勝敏

台湾で1月16日に行われた總統と立法委員の同日選舉は画期的なもので、台湾の歴史の一つの節目となる選舉だったと思います。私は1996年に始まつた總統選舉は今回で6回目。總統と立法委員の同日選舉は今回で2回目ですが、なぜ、歴史の節目なのかを以下、お話ししたいと思います。

われていたのですが、前回2012年から立法委員と同日選舉にしました。これは立法院で多数与党である国民党政府が決めたことです。日本でも衆参同日選舉ということがあります、同日選舉は一般には政権側に有利といわれます。總統選を前倒しにした結果、選舉で当選しても新總統が就任するのは4か月以上も後という異例なことになります。

選舉の結果は別表（表1）の通り、總統選は野党、民進党の蔡英文候補（党主席）が副總統候補の陳建仁候補と組んで立候補し、国民党の朱立倫候補（党主席）と王如玄候補との組に大差をつけて圧勝しました。今回の總統選ではこれまでと違うことは正副候補の党籍が3組とも違います。總統選は従来、3月20日に行

▼台湾初の女性總統の誕生

台湾の總統選挙、立法院選挙は4年一度行されます。總統はいわば大統領、立法院は国会です。總統は5月20日が就任式で、立法院は2月1日から新国会になります。總統選は従来、3月20日に行



表1 總統選の開票結果 (1月16日)

候補者	得票数	得率
蔡英文・陳建仁 (民進党：蔡英文・蘇嘉全)	689万4744票 (609万票)	56・12% (45.6%)
朱立倫・王如玄 (国民党：馬英九・吳敦義)	381万3366票 (689万票)	31.04% (51.6%)
宋楚瑜・徐欣瑩 (親民党：宋楚瑜・林瑞雄)	157万6861票 (37万票)	12.83% (2.8%)

いるのかもしれません。当選した蔡英文は2度目の挑戦でしたが、総統選での民進党候補の得票としては過去最高です。得票率も過半数を超えて過去最高でした。

台湾の総統直接選挙は李登輝時代の1996年が第1回で、今回は6回目。第2回の2000年に民進党の陳水扁が当選し、初の政権交代となりました。今回は2回目の民進党政権ですが、2008年には国民党の馬英九総統の誕生で、再び政権交代しているので、今回は3度目の政権交代です。5月20日の就任式で台湾で初めての女性総統が誕生することになり、まさに歴史的な就任式になります。

▼立法院、国民党は議席を半減

次に立法委員選挙です。前回2012年と比べると、与野党が見事に逆転しました。立法院の定数は113なので過半数は57ですが、前回、国民党は過半数を大きく超える67議席を獲得したのが、今回は半分に近い35議席でした。国民党はこれまで常に多数与党でした。過半数割れは立法院史上初めてです。しかも定数の3分の1以下という惨敗でした。

国民党の惨敗、民進党的圧勝は実は予想されていました。台湾の選挙は下層に行くほど国民党が強く、上層の選挙は民進

党が頑張るという傾向があります。一番上層部の総統選挙は人気投票的な色彩もあるため、民進党も善戦しますが、市議会やさらにその下の村長や里長（日本の町長に近い）はドブ板選挙で、これは日ごろ地域に密着して活動している国民党が強く、党组织が弱い民進党は劣勢です。

実際、県長、市长は国民党が多く、県議会、市議会は国民党が常に多数派。村長、里長となると、大多数は無所属ですが、そのほとんどは国民党系。民進党籍は1割にも満たないという状況でした。

それが2014年11月の統一地方選挙では激変したのです。台北、高雄など6つの直轄市の市长はそれまで国民党が4席を占めていたのですが、今回はわずかに新北市1席だけで、3つも失いました。

逆にそれまで高雄と台南の2市だった国民党は台中、桃園も獲得し、倍増。台北市も民進党が全面支持の無所属が勝ちました。その下の市議会や県議会でも民進党が大量に進出しました。

▼時代の流れは反国民党

今回の立法院委員選挙のもう1つの特色は第三勢力です。台湾には100以上の政党がありますが、2年前のヒマワリ学生運動以後、新党ブームが起きて、相次いで新しい政党が生まれました。そのうちのいくつかの政党が立法院選挙にも出馬し、善戦しています。おもしろいのは国民党系の新党は以前からある「新党」を含め全滅でしたが、民進党に近い新党は善戦し、なかでも「時代力量」は結党1年足らずで参選したのですが、5議席を得て、一応、第3党です。反国民党が今回の大きな潮流となっていることを示

りで、民進党が過半数を大きく上回る議席を獲得しました。前回、民進党が総統選に勝った2000年の陳水扁時代は、立法院で国民党が過半数を占めたのは初めてですが、一時的な人気で過半数を取ったというのとは違います。統一地方選挙での勝利でピラミッドの下の部分を固めて、その上の立法院、総統をとつたということですから、いわば地殻変動が起きているといえます。それだけにこの民進党の党勢拡大、国民党の劣勢は今後も続く可能性が大きいと思います。

今回の立法院委員選挙のもう1つの特色は第三勢力です。台湾には100以上の政党がありますが、2年前のヒマワリ学生運動以後、新党ブームが起きて、相次いで新しい政党が生まれました。そのうちのいくつかの政党が立法院選挙にも出馬し、善戦しています。おもしろいのは国民党系の新党は以前からある「新党」

しています。

《若者が蔡英文、民進党を押し上げ》

▼台湾初の女性総統の誕生

次に選挙の分析です。まず、民進党的勝因は「周子瑜」です。勝利の女神となつた彼女は16歳の台湾人女性タレントですが、韓国の9人のアイドルグループのメンバーで、韓国人のほか、日本人も3人います。グループは中国でも活躍、昨秋、中国で放映された番組にメンバーが自分の小さな国旗を持って出演しました。周子瑜は台湾人ですから青天白日満地紅の中華民国旗を持って出演しました。

ところがそれをみた中国で活動する台灣人タレントが「彼女は台独（台湾独立主義者）だ！」とネットで批判し、そこで中国のネットユーチャーたちが周子瑜を一斉攻撃。背後に中国当局の圧力があったのかわかりませんが、このグループは結局、決まっていた中国の様々な番組への出演がキャンセルになつてしましました。ようやくほとぼりが冷めようとしていた今年1月になつてまたくだんの台湾人タレントがネット攻撃を再開し、困ったアイドルグループの所属芸能プロダクションの指図だったのでしょうか、周子瑜

の謝罪動画をネットで流したのです。

周子瑜は喪服のような黒い衣装に身を包み、少しやつれた表情で「私は中国人です」「两岸は一体です」と90度腰を曲げて謝罪していました。すると今度はこれを見た台湾のネットユーザーたちが「中国の圧力だ」と騒ぎ出したのです。

2000年、民進党的陳水扁が總統に当選し、就任式典で中国でも人気のある歌手の阿妹（アーメイ・張恵妹）が中華

民国国歌を独唱、「台湾は中国の一部」だとし、中華民国を認めない中国がその独唱に怒って、阿妹は以後、中国で歌手活動ができなくなつことがあります。

中国の怒りが解けて阿妹が中国に行けるようになつたのは4年後です。多くの台湾人は周子瑜の動画を見てその阿妹のことを見出しました。「また、中国が不当な圧力をかけている！」と。

▼謝罪動画に怒つて若者は投票に動く

動画がネットで流れたのは1月15日夜。

投票日の前夜でした。蔡英文は最後の選挙集会の演説でこの周子瑜の話にもひと言触りました。「台湾人の心を傷つけた」と。動画を見ていなかつた若者も騒ぎ出し、親中国の国民党ではなく、中国とは

距離を置く民進党に投票しようと動いたのです。「周子瑜現象」とでもいうか、

確かにその夜の台北から地方へ行く深夜バスは投票に向かう若者たちで満員だつたといいます。台湾は不在者投票の制度がなく、有権者は必ず本籍地で投票することになっています。従つて都市部の大學生に通う学生は故郷に帰つて投票するし、中国で活動するビジネスマンも台湾に帰つて投票します。

さきほど話したように今回の選挙は民進党が勝つと予測する人が多く、ただでさえ一般に投票率が平均より低い学生など若者たちの多くは「俺が投票しなくても蔡英文が勝つ」と思い、棄権するつもりでいたのが、周子瑜の謝罪動画に刺激され、急遽、投票に動いたといいます。関係者の間ではその数、50万人ともいわれています。全体の投票数からみれば大きな数字ではありませんが、蔡英文、民進党支援のムード作りにはなつたでしょう。その効果は票数の何倍にもなつたと思います。

ここに1つのデータがあります。台湾智库という民間の民進党に近いシンクタンクの投票日の翌日の世論調査です（表2）。一般的には若者の投票率は平均より10ポイントぐらい低いといわれていますが、

20～29歳の投票率は74・5%で平均の72・2%を上回っています。総統選の実際の投票率は66・2%でしたが、これは世論調査の対象となつた人だけの投票率なので、実際より高く出ています。50～59歳が78・2%で最高で、若者はこれに次ぐ高い投票率です。高くなつたのがすべて周子瑜現象とはいえないでしょうが、周子瑜が若者を投票所に押しやり、もともと若者には民進党支持が多いだけに、蔡英文と民進党の票を増やしたとはいえるでしょう。

▼若者の政治的関心示す返郷投票バス

今回の選挙で若者の政治への関心を示す一つのおもしろい活動がありました。それは「返郷投票専車」活動です。さきほど述べたように台湾では本籍地

表2 総統選挙の投票率 (台湾智庫1月21日調査)

年齢	投票率	政党傾向	投票率
20～29歳	74.5%	民進党	87.4%
30～39歳	69.9%	国民党	65.0%
40～49歳	67.4%	親民党	72.8%
50～59歳	78.2%	台連党	64.1%
60～69歳	74.5%	時代力量	75.3%
70歳以上	70.6%	(全体投票率 72.2%)	

に帰つて投票します。帰郷にはお金がかかります。若者の投票率が低いのは経済的に厳しいから帰らずに棄権する人も多いからです。特に学生たちです。返郷投票専車そういう学生を対象に、投票のための帰郷バスを優待価格で走らす活動です。社会運動団体が前回の選挙でも同様の活動をしたことがあります、学生たちが自分たちの手でやつたのは今回が初めてです。

私が取材した台中市の大学生たちは6つの大学が共同で実施しました。12月下旬にインターネットで資金集めをして、投票日の前々日、前日、当日の3日間、台中から各地に無料で何本ものバスを走らせました。投票の1週間前の段階では定員の半分以下の申し込みでしたが、周子瑜現象も影響したのか、最終的には満員になつたそうです。台北市でもいくつかの大学で同様の活動があり、こちらはバス会社と交渉して定期路線バスに割り引き価格で乗れるというものでした。ここまで学生たちが自発的に活動するといふのは若者の政治への関心度の高さを示す一つの証左にもなります。

《若者が政治に目覚め、ヒマワリ運動》

▼前代未聞の議会占拠

台湾の若者が政治にここまで関心があるというのは、最近のことです。多くの若者が政治に目覚めるきっかけとなったのは2014年3月のヒマワリ(太陽花)学生運動でしょう。

この運動は直接的には、中国と結んだサービス貿易協定の立法院での強引な審議が原因です。委員会で野党の反対の中、国民党の委員長が委員会室の片隅に逃げて、ハンドマイクで審議打ち切りを宣言し、立法院の周辺で審議の行方を見守っていた学生たちが、その独断専行に怒って、抗議集会を開き、夜になって立法院になだれ込み、前代未聞の議会占拠をしたのです。

その後の展開はご承知の通りです。学生たちはバリケードを築き、議場には毎日、200人前後が寝泊り。内部は医療班、翻訳班など役割分担し、隨時、記者会見し、インターネットで内外に会見の模様などを発信して、20日以上も立て籠もりました。立法院の外では学生の活動を支持する若者が続々と集まり、周辺道路で野宿。それをまた支援する市民たちが弁当や水など差し入れを届ける。そのうちにテント村ができて、常時、千人以

上が周辺で寝泊りし、土日は地方からの学生も集まり、一帯は解放区のようになりました。

▼市民参加の50万人政府抗議デモ

台湾の学生の運動がこれだけ大きなものになるとは、日本など海外では驚きだつたと思います。3月30日の抗議デモは僅か3日前に20万人を目標に実施を決めて、インターネットで呼びかけて始めたのですが、当日は実に50万人が集まりました。警察発表は20万人でしたが、実際に50万人はいたと思います。警察の数字は1平方メートル何人という計算で瞬間の数字を弾いていますが、実際には道路から溢れて休憩する人や、早く来て先に帰る人、遅く来て残る人々。ですから合計すれば50万人はいたでしょう。

なぜこれだけの人が集まつたか。それは学生たちの運動が一般市民の支持を得ていたからです。デモの参加者に話を聞いていたからです。デモの国旗を振つたのですが、その小旗を警備陣が無理やり、取り上げたのです。「自分の國の旗を振るのがなぜいけないのだ」とデモ隊は抗議、警備陣とトラブルになりました。もちろんデモ隊は「歓迎」のためには旗を振つたわけではありません。中国は中華民国を認めていません。だから台湾は中国の反対でオリンピックでもではなぜ市民は学生を支持したのか。

ヒマワリ学生運動の源流は2008年の野イチゴ運動だと思っています。2008年は馬英九総統が就任した年です。馬総統は「中国に依つて経済をよくする」と言って当選し、中台交流を急速に拡大しました。中国と直接の通航、通信、通商という3通の実現、投資規制の緩和、中国人観光客の受け入れなどです。

こうした措置実現のため、海峡交流基金と两岸関係協会という交流窓口機関による対話を本格化させ、それぞれの代表が相互訪問し、中国側の陳雲林会長は11月、初めて台湾を訪問しました。

《野イチゴからヒマワリへ》

▼デモ隊の中華民国旗を没収

事件はこのとき起きました。中国からの客人が空港からホテルに向かう沿道にデモ隊が出て「歓迎」のために中華民国旗を振つたのですが、その小旗を警備陣が差し入れの食事などを届けたりしていました。デモ隊は毎日、演説会を開き、時に民進党の蔡英文主席も登壇しました。抗議は馬政権の「媚中」に対しています。運動は「野イチゴ運動」と名づけられました。今の若者は「傷つきやすく壊れやすい」という意味からだそうです。

▼ヒマワリ運動の原点は野イチゴ運動

その名の通り、運動は、結局は特段の

中華民国の旗は揚げることはできないし、WTO（世界貿易機関）にも中華民国ではなく、地域としてしか加盟できません。その中国高官の初訪台ですから、中国の意向に配慮して、台湾当局は高官に中華民国旗を見せないようにしたわけです。

デモ隊はそういう台湾当局へのいわばあつけで中華民国旗を振つたわけです。

中華民国を主張する中華民国の警察が中華民国の国旗を取り上げる——デモ隊は抗議のため行政院前で座り込みを始めました。当局の実力行使で排除されると、今度は場所を中正紀念堂に移して座り込みを開始。テントで寝泊りも始め、数百人規模まで膨れ上りました。この座り込みはヒマワリ学生運動とは違つて200~300人程度の小規模のものでした

が、寒さに向かう折でもあり、市民たちが差し入れの食事などを届けたりしていました。デモ隊は毎日、演説会を開き、時に民進党の蔡英文主席も登壇しました。抗議は馬政権の「媚中」に対しています。運動は「野イチゴ運動」と名づけられました。今の若者は「傷つきやすく壊れやすい」という意味からだそうです。

成果もなく、2か月ほど後に自然解消のように消えてしましましたが、私はこの野イチゴが後のヒマワリの原点だと思っています。野イチゴは毎日、活動の記録や予告をインターネットで発信していました。それを見て週末は地方から若者たちが集まつてくるため、平日は200人、300人の小規模な活動が、週末は500人、ときには1000人規模になりました。ヒマワリでやっていたことの原型がここにありました。

そしてこの運動に参加し、あるいは見に来ていた若者が、運動が消滅してから地方に戻ってそれぞれの地方の住民運動に参加したのです。ヒマワリ運動のリーダーもこの中から出てきました。陳為廷は苗栗県の土地強制収用反対運動に参加、苗栗県長に靴を投げつけて一時、拘束されました。黄国昌は旺旺集團によるメディア独占反対運動を指導、林飛帆もこれに参加、彼は2011年の中国のジャスマン（茉莉花）革命に呼応した中正紀念堂でのデモにも参加していました。

◆時代を動かす「天然獨」を生んだ

こうした「今時の若者たち」を最近の

言葉では「天然獨」といいます。日本人は私ももちろんですが、みんな自分が日本人であることを疑ったことはないでしょう。日本が独立国であることも疑わないでしょう。

でも台湾は違います。日本の統治時代を経験した人は日本人だと思っていたのに、戦後、本人の意思に関係なく中国人になりました。李登輝元総統がよく「私は22歳まで日本人だった」というのは有名です。戦後の蒋介石時代の教育を受けた人は、父も祖父も台湾生まれの台湾育ちなのにいまでも自分は中国人であり、台湾人と思う人もいます。国連に加盟できな台湾は本当の独立国ではないと思う人も多いです。

しかし李登輝以後の民主化の中で育ってきた若者たちの多くは何の迷いもなく自分は台湾人だと思っているし、台湾のパシポートで世界のほとんどの国に行ける今、台湾は主権独立の国と考える人は多いです。こういう若者を生まれながらの台湾独立主義者、天然獨と呼んでいるのです。

天然獨が生まれた背景には、台湾の民主化で初めて台湾の歴史を教えるようになつたこともあるでしょう。中国との交流が始まり、彼我の違いを認識したこと

もあるでしょう。こうした背景の中で馬英九政権が誕生し、中台交流が拡大、それに伴い中国から嫌がらせ、圧力、蔑視が増えました。それに正面から対応、抗議しない馬政権に若者たちは不満を抱き、嫌中感情を募らせてきたのです。いわば中国の台湾への圧力が天燃獨を誕生させた大きな原因でしょう。

◆外省人の若者も天然獨

ヒマワリ運動のきっかけは国民党の強引な議会運営でしたが、問題の法案は中国とのサービス貿易協定でした。根っこには「このままでは中国に呑み込まれる」という危機感があつたのです。

注目すべきはこうした若者の中に外省人も多くいることです。戦後、蒋介石といっしょに中国から渡ってきた外省人はもう高齢で、外省人の多くは台湾で生まれ、育った2世、3世になっています。新台湾国策智庫というシンクタンクが昨年12月に行つた世論調査があります。そこで「あなたは台湾人ですか、中国人ですか？」と聞くと、8割以上の人人が「台湾人です」と答えています。その中で年齢別で最も高いのは20～29歳で94・6%でした。

台湾の族群は台湾人が70%、客家が14

%、外省人も14%、残りが原住民といわれています。その比率から言えば、20歳代では94%が台湾人と思っているということは、外省人の若者の多くも「自分は台湾人だ」と思っているということで、彼らも「自分の国は（国民党ではなく）自分たちが救う」とデモしており、外省人の若者も「天然独」になっているわけです。

こうした天然独の増加がヒマワリ運動を起こし、一般市民の共鳴を得て、幅広い国民党政府批判勢力となり、一昨年の統一地方選挙で国民党を惨敗させ、今年の總統選、立法委員選でも惨敗させたのだともいえると思います。逆にいえば、総統選、立法委員選で民進党を勝たせたのは、天然独の増加ということになり、その源流は2008年に始まった急速な対中接近だったのではないでしょうか。

《厳しい国民党の再建》

▼国民党内でも嫌う「急進統一」

総統選、立法委員選での民進党の主な勝因が若者たちの支持だったとすれば、国民党の敗因は若者の支持を得られなかつたからということになります。ではなぜ、国民党は若者の支持を得られなかつたの

か。ひと言で言えば「混乱」でしょう。まずは候補者選びの混乱。昨春に始まつた總統選の候補者選びでは、統一地方選の惨敗で「どうせ負け戦（いくさ）だ」ということでしょう、有力候補がみな出馬しませんでした。党主席の朱立倫は党主席に選ばれた時から「總統選には出ない」と明言していました。副總統の吳敦義も出ないと断言。立法院院長の王金平は迷いに迷つて結局、立候補受付けギリギリになって不出馬を決めました。

で、出てきたのは女性の洪秀柱で、彼女は「レンガを投げて玉を引き出す」という言い方で出馬を表明。自分が出ることで有力者を引き出す誘い水のつもりだったのが、結局、大物がすべて出馬しなかつたため、そのまま總統選候補に決まってしまったのです。

▼「一つの中国」と「ONE TAIWAN」で自滅

选举戦に入つてからも混乱は続きました。政策面では国民党は中国と台湾の両岸関係は現状維持という民進党的蔡英文を攻撃し続けました。現状維持の中身があいまいだというのです。国民党も現状維持ですが、九二共識（コンセンサス）をベースにしての現状維持です。九二共識は「一中各表」。一つの中国が原則で、その中国はそれぞれが解釈するということで、台湾は中国とは中華民国だと主張していました。

国民党は蔡英文にもこの九二共識の肯定、つまり一つの中国の是認を明言するよう求めたのです。否認すれば、台湾独立主義だと攻撃するわけです。蔡英文はこの話題を避け、結局、認めませんでした。中国も、台湾が中国とは中華民国だというのを認めていないから、当然のことです。

結局、国民党も選挙戦では九二共識も一つの中国もあまり言いませんでした。言うのは馬英九總統だけでした。その馬英九は選挙にはほとんどノータッチでした、国民党の立法委員の大型選挙看板に何者かが「馬總統、全力支持」と書いた

ステッカーを貼り、国民党の候補が怒って警察に訴えるという事件もあったほどで、馬英九が応援に出てくると票が減る」と国民党の立法委員候補たちは心配していました。ですから国民党は党本部のビルの外壁に「ONE TAIWAN」（一つの台湾）と大書して、「一つの中国」のスローガンは引っ込めました。言っていることとやることが違う。これでは支持者がそっぽを向くのは当然です。実際に国民党支持者の投票率は平均を大きく下回りました。党指導部が四分五裂状態で、政策も論理矛盾。敗戦というより自滅と言ったほうが正しいでしょう。新たな党主席選びでも状況は変らず、国民党の再建はかなり厳しいと思います。

『統独論争の終焉、現状維持続く』

台湾で国政選挙となると、いつも議論になるのは「統一か、独立か」という問題でした。そこから「統独論争」といわれ、国民党は統一を志向、民進党は独立を目指し、激しい論争になり、党旗の色から統一派は「藍軍」、独立派は「緑軍」と呼ばれ、「藍緑悪闘」が年中行事になっていました。

この長い藍緑悪闘に一般市民は辟易し、

政治離れも増えました。そこへ馬英九政権が登場し、急速に対中接近、台湾丸の舵取りを統一方向に切り、中国は两岸関係緊密化に向かっている中で、引き続き台湾の国際社会入りを妨害し、圧力をかけてきたため、とくに若者たちの藍軍離れ、緑軍増大を招き、天然獨も生んだのです。

台湾の地図を總統選の得票数で藍と緑で色分けすると、前回2012年は藍が大半だったのが、今回は緑が圧倒、残った藍は人口の少ない台東県と花蓮県だけ。人口比から言えば、台湾はほぼ緑一色になつたといえるでしょう。しかも台湾を緑に染める原動力となつた若者たちは10年、20年すれば社会の中枢に入つて、台湾を動かす可能性は十分あります。

過大評価と思うかもしれません、実は前例があります。李登輝時代の1990年に民主化を求めた野百合学生運動が起きました。現在の民進党の立法委員の中には当時のリーダーが何人かいります。

一昨年の統一地方選挙で当選した台中市長と桃園市長がやはり元リーダーです。台中も桃園も直轄市です。この人たちは5年後、10年後には行政院長（首相）候補に名が挙がつてくるでしょう。場合によつては總統候補にも目されるかもしれません。

ません。

この前例からみれば、今回の天然獨の中から次代のリーダーが出てくるとみておかしくないでしょう。そういう意味で、長く続いてきた藍緑論争の時代は終わり、これからは統独にからむ两岸関係問題は選挙の主要な争点にはならないのではないかと思います。私はそういう意味で台湾の歴史の節目だと思っています。もちろん中国があれこれ手出しするでしょうが、下手に干渉すれば天然獨を増やすだけです。台湾が「急進独立」に向かない限り、中国も台湾海峡は現状維持でいくしかないと思うのではないでしょうか。

（敬称略）
 （2016年2月18日・公開アジア研究懇話会）

講師略歴（さこだ かつとし）

早稲田大学卒業。産経新聞社入社、福島支局、経済部。中日新聞社入社、東京新聞経済部、特報部、テヘラン支局、上海支局、北京支局、特報部長、台北支局、論説委員。台湾淡江大学、開南大学応用日本語学科非常勤講師、中日新聞（東京新聞）台北通信員。